



杉山卓朗の作品によせて

「立体的に見えること」、それが杉山卓朗の追い求めているテーマであるといえるかもしれない。ごく初期の作品から一貫して彼の興味は立体的なカタチを平面上に描き出すことにある。立体的なカタチではあるが、平面上に描かれるのだから、わたしたちがそこに見いだすのはあくまでもバーチャルな立体感である。いくつかの色面が集まっているだけでどうしてそこに立体を、空間をわたしたちは読み取ろうとするのか？彼はその「立体的に見える」という架空と現実との接合点、わたしたちの視覚が持つ奇妙な妥協点を見据えているようにも思われる。

彼の画面は「立体的に見える」パーツで構成されている。面相筆で丹念に塗りつぶされた明快な単色の面が組合わさって立体感を生み出す。あるいはやはり面相筆で引かれる明確な線によって立体めいた骨組みが浮かび上がる。「立体的に見えること」という主題は、たとえばステレオグラムや万華鏡のような対称性、わたしたちの頭の中のもつれた記憶のかたまり、文字のカタチなど様々な素材を通して繰り返し問われるのだが、その問いは彼の綿密な仕事に支えられている。彼は自分のアンテナに引っかかったことがらを丁寧に自分の言葉でとらえなおしてゆく。常に自分の手で確かめながらすすんでゆく。人の手にはゆだねられない何かをかたちにしてゆく。

最初に生まれるのはいくつかの気に入ったカタチであるらしい。それらのカタチは作者によってそれぞれに呼び名を与えられ、画面の上で回転、展開しつつ様々なヴァリエーションを奏でる。何度も反復され、画面にリズムを持ち込む。さながらカノンという楽曲形式が一つの主題を楽譜上で反転させるなどして反復しつつ展開するように。このカタチたちは画面を構成する基本的単位であると同時に、画面の上で進行する視覚的な出来事を水先案内するものと言ってもよいだろう。さらに、作者の細やかな色彩感受性によって選び出された一つの色の振幅がそれぞれのカタチに閉じ込められ、命を吹き込まれて「立体的に見える」パーツとなる。陰影のつけ方はあらかじめ計画されたものではなく、作業の進行に伴ってその都度その都度自然に決まる。部分に先導されながら全体が紡がれ、全体とのバランスで部分が決定していくのである。

美術はやはり空間の精密な探求のためにふさわしいとパウル・クレーは言った¹。空間についての探求はキリスト教西欧の絵画の伝統なのだ、とクレーは言いたかったかもしれない。しかし、その伝統とはちがうかたちで、非キリスト教的な、わたしたちにとっての空間とはどんなものなのかを問う美術が現れてもよいはずである。日本人としてのわたしたちの空間感覚はキリスト教西欧のものとはおそらく異なっているのだから。

¹ Paul Klee, Exakte Versuche im Bereich der Kunst. *Bauhaus*, Bd.2, H.2/3 doppelheft, 1928, S.17.



村上 隆はキリスト教西欧絵画の伝統との関わりにおいて、日本絵画における「平面性」を海外に進出するための戦略として打ち出した。しかしそれはやはり西洋絵画の伝統的価値観を前提とした切り口であるといえる。

杉山卓朗の作品を構成する「立体的に見える」パーツたちは決して透視図法的な一点に収束していない。その陰影は一方向から射し込む光を想定したものではない。彼が描き出すのは一点透視図法が作り出すような連続した均質な空間の切り取りではないのだ。その点において、そして画面が基本的単位によって構成されるという点において彼の形式は、むしろ遠近法的手法と袂を分かった時期のキリスト教西欧絵画の試みと親和性を持つ。とはいえその背景はまったく異質だ。彼はグラフィティから絵画の世界へ足を踏み入れたという。既成の価値観への反抗を、反抗する対象は置き去りにしたまま絵画の手法の一つとして輸入したわたしたちは、その空白に自分たちなりの解釈を充填しつつ枝葉から幹へと掘り下げていくしかない。彼も自分なりの世界の感触を頼りに「立体的に見えること」へと逆行を続ける。その道筋に西洋近代絵画が選んだものとは異なる選択肢を探しながら。

わたしたち日本人の空間感覚とはどのようなものなのか。わたしたちの住む街の入り組んだ路地に、平面的な布で身体を包む着物に、回りくどい話の持っていく方に、それは見え隠れする。杉山卓朗の作品はそんな折り畳み可能で不可思議なわたしたちの空間感覚を、独特のユーモアと楽天性を湛えながら描き出しているのではないだろうか。「絵画には他のジャンルにはない強みがある」と彼は言う。「他のジャンルの作家が一番始めに否定して、考える気にもなれないようなことが絵を描くことの一番の強み」なんだと。はたして日本における絵画というジャンルは、キリスト教西欧文化の表面的な受容による意味の不在を越えて、新たな空間表現の可能性と価値を見出しうるのだろうか。彼の歩みの先には何が見いだされるのか。彼の今後の活躍に期待したい。

大手前大学／神戸松蔭女子学院大学・非常勤講師

上久保 真理